

日本語教育の10年

松岡 弘

はじめに

一橋大学において専門家による日本語教育が始まったのは1980年秋のことであり、以来すでに18年の歴史を刻んでいる。最初の6年半は、主に外部の講師に依頼して行われた土曜日午後の日本語課外補講で、一橋大学の留学生だけではなく、東京多摩地区の諸大学に在籍する留学生も参加した。しかし、これについては、拙稿*1ですでに詳しく述べているので、参照されたい。ここでは、留学生のための日本語が正規科目として開講された1987年以降の10年間に焦点を絞り、その歴史を振り返ってみることにする。

1. 日本語教育体制の確立と基本的な性格

一橋大学において日本語教育の必要性が最初に叫ばれたのは、大学院の研究生に対してであった。日本政府の奨学金により招致される国費研究生は、日本語ができない場合にはまず、しかるべき留学生センターで6か月間の日本語予備教育を受け、その後それぞれの受入れ大学に送り出される。しかし、6か月の教育期間では大学院での専門教育を日本語で受けるレベルには到底達することができず、そのため受入れ大学側でも日本語の指導が必要となるが、80年代の中頃までは、いくつかの大学を除いて専任の日本語教師は任用されていなかった。そこで最初に触れたような、学外講師による課外補講が行われたのであった。

こうした中で、1986年10月、日本語日本事情担当教官が1名(松岡)採用された。松岡は、前期教育(一般教育科目・外国語科目・保健体育科目を主とする最初の2年間の教育)を担当する教官として任用された。当時、前期教育は小平キャンパスで行われており、これを主に担当する教官は「学科目教官」あるいは俗に「小平教官」と呼ばれていたのであるが、小平教官としての外国語科目教官は、主に学部の1、2年生対象の必修外国語を担当し、その一方、国立キャンパスで開講される、後期課程(3、4年生)対象の学部共通科目(どの学部の学生でも履修できる科目)としての外国語科目も、交代で担当していた。こうして松岡も、英語、ドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語、ギリシャ・ラテン語の担当教師の例にならって、外国語科目教官の一人として以下の2種類の日本語科目を担当することになった。

*1 松岡弘「一橋大学における日本語教育—これまでの十年・これからの十年—」『一橋論叢』107-3, 1992.3)

（Ⅰ）前期必修科目としての日本語

（Ⅱ）後期共通科目としての日本語

（Ⅰ）は、規定上は「必修」となっていたわけではない。しかしながら、学部生は全員1、2年次に外国語2科目必修になっており、留学生も同様であった。ただし、留学生には履修特例があって、この規定に従えば、留学生のための特殊科目、すなわち「一般日本事情」「日本の科学技術」「外国人留学生社会科学ゼミナール」そして「日本語」をとることが義務づけられ、その分は一般教育や外国語の履修科目数を減らすことができた。ほとんどの留学生がこの特例を活用したので、結果的に日本語科目が留学生にとって必修外国語科目となったのである。

なお、留学生のためのその他の科目は、「一般日本事情」を外国語科目教官、「日本の科学技術」を理科科目教官、「外国人留学生社会科学ゼミナール」を各学部の専門科目教官が交代で担当した。これは、留学生教育は特定の学科目教官に限定しないで全体であるという方針があったからで、松岡は日本語日本事情教官として着任したが、「一般日本事情」科目をすぐに担当することはなかった。

（Ⅱ）の「後期共通科目」とは、制度上は3・4年生を対象とし、どの学部の学生でも共通に履修できる科目のことである。ただ、日本語科目の場合、学部3、4年の留学生がこれを履修することはなく、受講者は、ほぼ聴講生・研究生・大学院生に限られていた。

さて、英語やフランス語などの外国語科目では、前期の授業の方が科目数も履修者も多く、全体に占める割合が大きい。一方日本語の場合は、むしろ後期の授業に出る留学生の方が、日本語学習の必要度が高い。そこで、日本語日本事情担当教官としては、（Ⅰ）を担当しながらも、できるだけ（Ⅱ）の日本語授業も多くして、学部生以外のカテゴリーやレベルの異なる留学生に対応できる日本語教育体制を学内に築くことを目指した。このことは、後の研究生の増加のみならず、交流学生や日本語日本文化研修生の受け入れ拡大を予想した体制を当初からとっていたことを意味し、また、全ての日本語科目を最初から正規科目として開講し、単位認定を行っていたことが、結果的には、単位互換が前提となる交換留学生制度のスムーズな導入につながったといえる。

このように、（Ⅱ）を充実していくことは、とりもなおさず全学の日本語教育を担うということであったが、この方針は、その後、日本語日本事情担当教官がさらに増え、日本語教育体制が拡大・整備されていく中でも基本的には維持され、現在に至っている。

2. 大学教育改革の中の日本語教育

1990年ごろから、大学全体をゆるがす大きな改革の嵐が吹き始めた。そしてそれは、92年の後半からは阿部謹也現学長のもとで本格的なものとなり、日本語日本事情教官の属する前期教育部門はもとより、日本語教育体制を巻き込む大改革が3年間にわたって検

討され、96年春からは次々と実現し、実行に移される運びとなった。

具体的には、次のような内容の改革が96年に行われた(⑥は、98年度から)。

- ① 四年一貫教育体制の導入と新たな教養教育カリキュラムの実施(4月)
- ② 小平教官の学部へのインテグレーションまたは独立研究科③への配置替(4月)
- ③ 独立研究科「言語社会研究科」の新設(5月)
- ④ 「留学生センター」「留学生課」の新設と日本語日本事情教官の配置替(5月)
- ⑤ 小平キャンパス老朽校舎の国立地区への建替移転とキャンパスの統合(10月)
- ⑥ 神田一橋講堂跡地建物建設と独立研究科「国際企業戦略研究科」の新設
(98月4月発足。西暦2000年4月より学生受け入れ開始)

これらは相互に深く関連しあい、また、どれを捉えてもそれぞれが大きな問題であったが、1993年から95年までの3年間、各種委員会、教授会、小平教官の教官会議(一般教育科目等教官会議)等において各課題が独立に、あるいは、関連して議論され、最終的には現在見られるような形をとって現実化していった。

松岡は特に、①に関する「前期一般教育科目等教育改革委員会」の委員と、⑥を討議する「独立研究科委員会(神田跡地建物)」の前期教官選出委員を務め、また④については、3名の日本語日本事情教官が全員これを議論し決定する「学生国際交流委員会」の委員として深くかかわってきた。そこで、その過程で議論の対象とされたことや取り上げられたものの、実現には至らなかった構想などの中から、以下のことを記録にとどめておきたい。

1) 「(社会科学) 高等日本語研究教育施設」の提案

前期の一般教育(外国語を含めた)の内容や教官組織を改革する議論の過程で、また、国立にキャンパスを統合した後の小平跡地をどう利用するかを議論する過程で、つまり①～③の議論の中で構想され、小平教官サイドから提案されたものである。一橋大学における日本語教育を、より社会科学の内容に専門化し、そのための教材開発や研究教育活動を行う拠点を作るというもので、新設予定の独立研究科の附属機関とし、設置場所は規模によっては、空き地となる小平も候補の一つとした。この案は、大学改革推進委員会の教官組織専門委員会でも取り上げられ、学内的には一定の評価をえたが、文部省の認めるところとはならなかった。

2) 独立研究科(神田)に「日本語学・日本語教育学」専攻の設置提案

神田の一橋講堂跡地に建設予定の独立研究科の一部門として、小平教官サイドから大講座名「地域文化交流」を構想し、その中に、社会人入学者向けの日本語学、日本語教育学を含む講座を作ることを提案した。社会人のための夜間大学院ということで社会的な需要は大いにあると考えられたが、企業の中堅層を対象としたアンケートによるニーズ調査ではあまり評価が得られず、結局取り下げられた(新設予定の独立研究科では、海外からの留学生の積極的な受け入れを考えているとのことだったので、そのための日本語教育と、社会人入学者に対する日本語教師養成と実習を結びつけようとしたアイデアでもあった)。

3) 「留学生センター」の設置要求

これは当初は、大学改革というよりは文部省による留学生教育体制整備の一環という面があった。学内共同利用教育研究施設としての「留学生センター」は、1992年の時点で全国ですでに13大学に設置されており、一橋大学でも留学生数の増加への対応、留学生関係事務部門の整備、さらには日本語教育部門と生活指導・留学生相談部門を一体化する組織の必要性といった面から、センター設立への要求が次第に強まっていた。ただ、当初は「(社会科学) 高等日本語研究教育施設」の実現を目指していたこともあって、その間は「留学生センター」の設置要求をしなかった。そして95年に至って初めて設置概算要求を行い、翌年の96年5月に設置された。

この激動の3年間には、「高等日本語研究教育施設」あるいは「留学生センター」をどこに設置するのか、日本語日本事情教官は学部へのインテグレーションの対象となるのかならないのか、さらには、留学生センター設置に伴う初心者のための6か月予備教育の実施の是非等をめぐって熱い議論が交わされたが、最終的には留学生センターを設置し、そこを拠点として初心者コースから専門的ハイレベルの日本語教育までを実施できる体制を学内に確立する、これによって留学生の現実的なニーズに適切、かつ柔軟に対応できるようにするとともに、一橋大学に相応しい社会科学分野の学術的な日本語教育とそのための基礎的な研究を総合的に進めるという大きな目標に向けて歩み出すことになった。

こうして、96年以後は、新設の留学生センターを中心にした体制の下に、最初に記した(Ⅰ)前期必修科目としての日本語、(Ⅱ)後期共通科目としての日本語(新カリキュラムでは共に「教養教育・共通基礎・外国語科目」となっているが、履修要件は従来とそれ程大きく変わらない)に、(Ⅲ)6か月間集中日本語予備教育(「日本語研修コース」)が加わり、その後2年間は、この3本を軸として、日本語教育体制と内容が構成されてきたといえよう。

そこで以下では、87年度から10年間の教育内容や担当教師、受講学生、日本語補講クラス、その他の講義や授業、作成教材、教室・設備等について、項目にわけて記すことにしたい。

3. 日本語科目：科目名・開講形態・コマ数・単位数・担当者

1987年度から96年度までを本稿末の別表に掲げた。

4. 日本語教育担当者

12年前にたった一人の教官から始まったのが、1998年度現在では兼務による日本語授業担当者を含めて専任教官は8名、非常勤講師は10名という、かつてとは比較にならない規模となった。以下に97年度までの日本語教育担当者の着任時期または勤務期間を示す。

専任教官	松岡 弘	1986年10月小平に採用。1996年4月留学生センターに配置替え
	三枝令子	1989年10月小平に採用。1996年4月留学生センターに配置替え
	今村和宏	1994年11月小平に採用。1996年4月留学生センターに配置替え
	五味政信	1996年10月留学生センターに採用
	鶴田庸子	1996年10月留学生センターに採用
	庵 功雄	1997年 2月留学生センターに採用
	中村重穂 (経済学部)	1989年度～1991年度
	今村和宏 (#)	1992年度～1994年度
	西谷まり (#)	1995年度～
	杉田くに子 (社会学部)	1996年度～
非常勤講師 (学部科目)	金子比呂子	1988年度夏学期～1990年度冬学期
	岡田ジュディー	1991年度夏学期
	川口さち子	1991年度冬学期～1993年度冬学期
	小林幸江	1993年度夏学期～1995年度夏学期、1996年度冬学期
	田辺和子	1994年度夏学期、冬学期
	梅岡巳香	1995年度夏学期～
	西谷まり	1995年度夏学期
	杉田くに子	1995年度冬学期
	丸谷しのぶ	1996年度冬学期

留学生センター非常勤講師

本号の「年報」欄に掲げた。

春季・秋季日本語コース担当講師

1994年度春季	クラスA 立野みどり	安田芳子	下田伸子
	クラスB 高橋美和子	中川まち子	
1995年度春季	クラスA 立野みどり	安田芳子	下田伸子
	クラスB 高橋美和子	中川まち子	
	クラスC 中野泰子	藤田幸世	
1996年度春季	クラスA 三角友子	瓜生佳代	
	クラスB 立野みどり	安田芳子	下田伸子
	クラスC 中野泰子	田中久美子	梅岡巳香
	クラスD 高橋美和子	中川まち子	

1997年度秋季・春季日本語コースの担当者は、「年報」欄に掲げた。

5. 留学生の傾向と日本語科目

[前期必修日本語]

1987年4月時点での留学生総数は128名、そのうち学部1年は9名、2年は10名で、これが前期必修科目としての日本語Aと日本語Bの履修者であった。この頃は入学当初から国費留学生（日本政府が選考し奨学金を与えて招聘、東京外国語大学または大阪外国語大学における一年間の予備教育を経て大学に配置される）と私費の留学生（大学の留学生特別選考試験に合格して入学が認められる）との間に日本語の学力差はほとんどなく、というよりも国費留学生は全てエリートともいってよい優秀な学生ばかりであった。一方、ある国からの政府派遣留学生（本国政府の奨学金によって派遣される）についてはその日本語力や勉学意欲等が問題とされることがあり、自由選択の日本語Cと日本語Dを90年から設けたのは、それへの対

応といった面があった。

89年に、初めて中国人留学生が正規学部生として1名入学した。その後は加速度的にその数が増え、私費留学生のほとんどを中国人学生が占めるようになり、それまで私費留学生の場合でも国籍にバラエティがあったのがなくなっていった。また、中国人学生の日本語力は総じて優れていたため、国費留学生との日本語力の差が目立つようになってきた。この傾向は、94年度から国費留学生の受け入れ枠が大幅に拡大し、その中に必ずしも日本語力の点で十分とは言えない学生も混じるようになってからは、さらに顕著になってきた。こうした事態を踏まえ、96年度導入の新カリキュラムでは、日本語Aと日本語Bはもっぱら国費留学生対象の科目と限定し、私費留学生は日本語以外の外国語を履修するように指導するようになった。とはいうものの、日本語力の高い私費留学生にも日本語科目の履修希望があり、教養教育の日本語科目の中によりレベルの高い内容の授業を設け、これに対応することが必要となりつつある。

〔後期共通日本語科目・教養教育日本語科目〕

後期共通日本語を履修する学生は、当初は研究留学生（この中には、学术交流協定校のケルン大学とHECからの学生が含まれる）が中心で、その多くは単位を必要としない受講者であった。序でながら、1988年から3年間、中国人の聴講生が急激に増え、一部が日本語科目を履修したことがある。彼らの多くは勉学というよりも日本滞在許可を得るために聴講生制度を利用したのであり、その後、聴講生の選考方法を厳しくしたことで正常に復した。

いわゆる交流学生の受け入れは89年10月に始まっているが、90、91年は以前から交流のあるドイツ・ケルン大学からの学生が中心で数も少なく、全体に日本語力は初・中級レベルであった。92年になって、ドイツに加えて、アメリカとオーストラリアの学生交流協定締結校からの受け入れが本格的に始まることになり、学生交流協定校が年々増していくにつれて、いろいろな大学の様々なレベルの交流学生が日本語授業に出席するようになった。その多くは単位互換制度により単位の認定を求める点で共通であり、このため、以前にもまして、厳密な成績評価基準の確定が必要となってきた。

大使館推薦の日本語日本文化研修生（日研生）を受け入れるようになったのは、96年10月からで、この年は5名受け入れた。これ以前に受け入れていた日研生は全て大学推薦による、主たる専門分野が社会科学の学生に限定されていたが、文部省の日研生採用基準が文字通り日本語または日本文化に限られるようになり、一橋大学にもその分野の学生が大使館推薦日研生として配置されるようになって現在に至っている。日研生の教育については一橋大学は特別コースは設けず、指導教官の3・4年のゼミナールに参加させ、その外は、それぞれ自由に日本語科目や学部専門科目を履修させている。しかしながら、以前と違って、日本語または日本文化を専攻する学生が主力となったので、日本語担当教官が指導教官となって指導に当たるケースが次第に増えてきている。

最後に、教養教育日本語は大学院生も受講することができるが、大学院科目ではないからこれまで単位は認められなかった。だが、98年度からは社会学研究科の留学生にかぎり、留学生センター日本語教官の承認を得て履修した日本語科目については一定範囲内で単位が認められることになった。

このように、かつての後期共通日本語、現在の教養教育日本語の授業には、大学院進学を目指す研究生、1年間だけ在籍し単位を持ち帰る交流学生、同じく1年間在籍の日本語日本文化研修生、さらにまた、学部生あるいは大学院生という、それぞれに背景・レベル・目的を異にする留学生が机を並べて学んでいるというのが今の状況である。

こうした歴史をたどってきて最後に、1996年5月に留学生センターが設置され、これに伴い、同年10月からは初心者も含む研究留学生のための6か月集中日本語予備教育（「日本語研修コース」）がいよいよ開始されることになった。このコースの参加者である「日本語研修生」の多くは一橋大学配置の研究生であるが、他大学配置の研究生も含まれる。また、他大学配置の場合は専攻が社会科学ではないこともある。これは従来の一橋大学にはなかったカテゴリーである。

このコースについては、「年報」欄で後述する。

6. 日本語補講クラス（「春季・秋季日本語コース」）

正規科目として日本語教育を行うのが長い間の一橋大学の方針であったが、上に述べたような学習者の増加と多様化に対処するために、また、夏休み期間と2、3月の授業のない期間を有効に利用するため、特別に補講クラスを実施することにし、まず、春季日本語コースを3年間開講した。

1994年度春季日本語コース	1995年2月～3月	5週間・80時間
1995年度春季日本語コース	1996年3月	3週間・70時間
1996年度春季日本語コース	1997年3月	3週間・70時間

なお、97年度からは、春季コースに加えて秋季コースも行うことになった。

これらのコースは、もともとは大学に在籍している留学生一般を対象としたものであるが、4月あるいは10月に来学予定の交流学生の多くが学期開始の1か月前に渡日してこのコースに参加するようになり、また、16週間の日本語研修コースを修了した研究生が、引き続き参加するコースとしても位置付けられ、その役割がますます大きくなっている。

7. その他の科目

7-1. 学部教育科目としての「経済の日本語」「社会・人文の日本語」の担当

経済学部では、日本語教育の専門家が学部所属の「留学生専門教育教官」として任用され（中村、今村、西谷）、1992年以来、学部教育科目としての「経済の日本語」を担当する

かたわら、その他の日本語授業も担当してきた。また、社会学部でも、97年から「社会・人文の日本語」が開講され、社会学部の留学生専門教育教官と留学生センター日本語教官が担当するようになっている。専門分野毎の、より高度な日本語教育を目指す上でも、こうした開講形態と協力関係は今後も重視され、維持されていくことになろう。

7-2. 共通ゼミナールの担当

教育改革が行われる以前から、いわゆる小平教官の中の外国語科目教官は、後期課程の3・4年対象の共通ゼミナールを開講することができた。これにより、松岡は1987年以来95年まで「日本語教育」を専門分野とするゼミナールを行い、日本人学生・外国人学生を問わず、日本語教育または現代日本語文法に関心を持つものを受け入れて指導した。その後は、これらの分野に関しては三枝ゼミが担当し、松岡ゼミは日研生のためのゼミナールとしての役割を担うことが多い。

7-3. 大学院の担当

92年度から社会学研究科長の要請により、松岡は同研究科の講義ならびにゼミナールを担当することになった。95年からは、講義の一つを「専門日本語」とし、特別に留学生のための文語文の指導にあてることにした。さらに、96年以降の教官組織の改革と全小平教官の学部へのインテグレーションに伴い、三枝と今村がそれぞれ法学部と経済学部の研究科で、主に研究科所属の大学院留学生を対象とした講義を開始することになった。

7-4. 言語文化科目、及びその他の科目の担当

96年冬学期から、新カリキュラムの教養教育科目の一つとして「言語文化科目」が設けられることになり、日本語担当教官が「現代日本語論」を担当することになった。97年度からは「現代日本語論Ⅰ」（夏学期）と「現代日本語論Ⅱ」（冬学期）とした。

なお、7-1～7-4にあげた科目以外でも、学内の要請や教官の専門分野により、協力的に対応してきた。

8. 日本語教育出版物・教材

留学生センター設置前に作成された教材や出版物は以下のとおりである。

- ①『留学生のための日本語文法—その1—』（松岡、1988.3）
- ②『留学生のための日本語文法—その2—』（松岡、1991.3）
- ③「日本語文法CAI」（三枝・中村・松岡企画・監修、1991.4）
- ④「日本語漢字CAI」（『新聞の漢字』（豊田豊子）準拠・三枝監修、1991.10）
- ⑤『留学生のための日本語教科書—学術日本語の基礎』（松岡、1994.3）
- ⑥『初級日本語・文法解説書』タイ語翻訳版作成（1996.3）
- ⑦『初級日本語・文法解説書』スペイン語翻訳版作成（1996.3）

(⑥、⑦は、東京外国語大学留学生日本語教育センター編『初級日本語』に準拠したもので、同センターの了承を得て作業を行った。その際、同センターより和文と英文の文法解説書の提供をうけた)

9. 教室・設備

キャンパス統合(1996年冬学期より)以前は前期必修日本語は小平キャンパスの一般教室で、後期共通日本語は国立西キャンパスの、主に本館の教室を使って行われた。これは、本館にしか教室備えつけの、あるいは移動用のビデオ装置がなかったことによる。また、90年以後は本館の1室が視聴覚教室兼CAI室(現在の「日本語指導室」として日本語教育のために提供されている。

留学生センター発足後は、第1講義棟の1階の4室(98年からは5室)が「日本語研修コース」専用の教室、LL室、教官控え室兼教材作成室として使用されている。その他の日本語授業も、今では一部は東キャンパスの新校舎で、残りは第1講義棟の一般教室で行うことが多くなっている。

このような教室、CAI室、研究室、留学生課、留学生相談室等の分散配置状態を解消するため、センターの設立以来「留学生センター」独自の建物の建設を要求している。

1987年以後97年度までに留学生教育用に整えられた設備・備品のうち、主なものを以下に示す。

- ① ビデオレコーダー及びビデオモニター(ベータマックス方式)等一式。
(小平キャンパス設置。現在は、東キャンパス教室に移動。86年度教育方法等改善経費「社会科学系大学における留学生日本語教育方法の研究と開発」により購入)
- ② 語学学習用パソコン7台他一式。
(日本語指導室設置。89年度教育研究特別経費「パソコンによる語学教育支援システム」により購入)
- ③ 教材提示装置・スチルビデオレコーダ・大型カラーテレビ等並びに通信関係機器一式。
(日本語指導室設置。93年度教育研究特別経費「語学静止画教材の開発と語学教育環境の整備」により購入)
- ④ LL装置及び視聴覚教育設備等。
(留学生センター教室設置。96年度留学生特別経費により購入)
- ⑤ 語学学習用CAI用パソコン・ネットワークシステム一式(②の更新)
(日本語指導室設置。97年度留学生経費により購入)

おわりに

以上、1987～96年度(一部97年度を含む)の一橋大学における日本語教育10年の歩

みを振り返ってみた。改めてその成長・拡大の目覚ましさと変化の大きさを感じざるを得ないが、これからの 10 年は、こうした努力と実績を踏まえ、教育の中身をさらに一層充実させることが最大の課題であろう。

〔別表〕日本語科目：科目名・開講形態・コマ数・単位数・担当者

1987（昭和62）年度

前期日本語科目 「日本語A」（1年次・週1コマ・通年・2単位・松岡）

「日本語B」（2年次・週1コマ・通年・2単位・松岡）

* 1）当時、前期外国語科目は、週1コマ/通年=2単位とされた。

2）外国人留学生の履修特例を活用すると、「日本語」「一般日本事情」「外国人社会科学ゼミナール」「日本の科学技術」を一括履修することが義務づけられる。履修特例が変更になる92年まで、留学生はほぼ全員、履修特例によって日本語を履修した。

後期日本語科目 「日本語第一」（初級・週2コマ・冬・4単位・松岡）

「日本語第二」（中級・週2コマ・夏・4単位・松岡）

「日本語第三」（上級・週1コマ・通年・4単位・松岡）

* 1）当時、後期共通外国語科目は、週1コマ/通年=4単位とされた。

2）ゼメスター制を取り入れ、中級を夏学期、初級を冬学期としたが、現実にはうまく区分できなかった。

1988（昭和63）年度

前期日本語科目 「日本語A」（1年次・週1コマ・通年・2単位・松岡）

「日本語B」（2年次・週1コマ・通年・2単位・松岡）

後期日本語科目 「日本語第一」（初級・週1コマ・通年・4単位・松岡）

「日本語第一」（初級・週2コマ・通年・8単位・金子）

「日本語第二」（中級・週1コマ・通年・4単位・松岡）

「日本語第三」（上級・週1コマ・通年・4単位・松岡）

*ゼメスターを通年に戻し、第一をさらに2コマ分（土曜日1、2時限）増やして、非常勤講師に依頼した。第二についても、同じ時間帯に設定した。

1989（平成元）年度

前期日本語科目 「日本語A」（1年次・週1コマ・通年・2単位・松岡）

「日本語B」（2年次・週1コマ・通年・2単位・松岡）

後期日本語科目 「日本語第一」（初級・週1コマ・通年・4単位・松岡）

「日本語第一」（初級・週2コマ・通年・8単位・金子）

「日本語第二」（中級・週1コマ・通年・4単位・松岡）

「日本語第二」（中級・週1コマ・通年・4単位・中村）

「日本語第三」（上級・週1コマ・通年・4単位・松岡）

*第二を1コマ増やし、留学生専門教育教官（経済学部）中村が担当した。

1990（平成2）年度

前期日本語科目 「日本語A」（1年次・週1コマ・通年・2単位・三枝）

「日本語B」（2年次・週1コマ・通年・2単位・松岡）

「日本語C」（1年次・週1コマ・通年・2単位・松岡）

「日本語D」（2年次・週1コマ・通年・2単位・三枝）

*CとDは、自由選択。主に、政府派遣学生のために設けた。

後期日本語科目 「日本語第一」（初級・週2コマ・夏・4単位・金子）

「日本語第一」（初級・週2コマ・冬・4単位・金子）

「日本語第二」（中級・週2コマ・夏・4単位・松岡）

「日本語第二」（中級・週2コマ・冬・4単位・松岡）

「日本語第三」（上級・週2コマ・夏・4単位・三枝）

- 「日本語第三」（上級・週2コマ・冬・4単位・三枝）
- 「日本語第四」（特殊・文法 週1コマ・通年・4単位・松岡）
- 「日本語第四」（特殊・CAI・週1コマ・通年・4単位・三枝）
- 「日本語第四」（特殊・総合 週1コマ・通年・4単位・中村）

- * 1) 三枝の着任（日本語日本事情教官）により、クラス数の増加と大幅な改革が可能となった。
- 2) この年から第一、第二、第三をすべて、夏・冬のゼメスターとした。

1991（平成3）年度

- 前期日本語科目 「日本語A」（1年次・週1コマ・通年・2単位・三枝）
「日本語B」（2年次・週1コマ・通年・2単位・松岡）
「日本語C」（1年次・週1コマ・通年・2単位・松岡）
「日本語D」（2年次・週1コマ・通年・2単位・三枝）

*この年に学部履修規定が大きく改正され、一般学生の履修単位数が軽減されたが、留学生にはすでに履修特例があるため、それが改正されることはなかった。そのため、履修単位数に関しては、日本人とあまり違わなくなった。

- 後期日本語科目 「日本語第一」（初級・週2コマ・夏・4単位・岡田・土1、2）
「日本語第一」（初級・週2コマ・冬・4単位・川口・水3、4）
「日本語第二」（中級・週2コマ・夏・4単位・松岡）
「日本語第二」（中級・週2コマ・冬・4単位・松岡）
「日本語第三」（上級・週2コマ・夏・4単位・三枝）
「日本語第三」（上級・週2コマ・冬・4単位・三枝）
「日本語第四」（特殊・文法 週1コマ・通年・4単位・松岡）
「日本語第四」（特殊・CAI・週1コマ・通年・4単位・三枝）

*冬学期から、非常勤講師担当の第一を土曜日1、2時限から水曜日3、4時限に変更し、以後は原則的にこの時間帯に設定し、できるだけ多くの留学生が受講できるようにした。

1992（平成4）年度

- 前期日本語科目 「日本語A」（1年次・週1コマ・通年・2単位・三枝）
「日本語B」（2年次・週1コマ・通年・2単位・松岡）
「日本語C」（1年次・週1コマ・通年・2単位・三枝）

* 1) 履修特例が改定され、留学生科目は一括履修から選択履修へと変更され、日本語を除く留学生科目は、一般教育科目の置き換え科目となった。この措置で、履修特例は活用しても、日本語を履修しない学生が増えてきた。

2) 「日本語D」（自由選択）を設けることをやめた。

3) この年から、「一般日本事情」は、松岡が担当することになった。

- 後期日本語科目 「日本語第一」（初級・週2コマ・夏・4単位・今村）
「日本語第一」（初級・週2コマ・夏・4単位・川口）
「日本語第一」（初級・週2コマ・冬・4単位・川口）
「日本語第二」（中級・週2コマ・冬・4単位・今村）
「日本語第二」（中級・週2コマ・夏・4単位・松岡）
「日本語第二」（中級・週2コマ・冬・4単位・松岡）
「日本語第三」（上級・週2コマ・夏・4単位・三枝）
「日本語第三」（上級・週2コマ・冬・4単位・三枝）
「日本語第四」（特殊・文法・週1コマ・通年・4単位・松岡）
「日本語第四」（特殊・CAI・週1コマ・冬・2単位・三枝）

*留学生専門教育教官（経済学部）今村の協力を得て、第一（夏）、第二（冬）のコマ数を増やした。

1993（平成5）年度

- 前期日本語科目 「日本語A」（1年次・週1コマ・通年・2単位・三枝）
「日本語B」（2年次・週1コマ・通年・2単位・松岡）
「日本語C」（1年次・週1コマ・通年・2単位・三枝）
- 後期日本語科目 「日本語第一」（初級・週2コマ・夏・4単位・今村）
「日本語第一」（初級・週2コマ・冬・4単位・三枝）
「日本語第一」（初級・週2コマ・夏・4単位・小林・水3、4）
「日本語第一」（初級・週2コマ・冬・4単位・川口・水3、4）
「日本語第二」（中級・週2コマ・夏・4単位・松岡）
「日本語第二」（中級・週2コマ・冬・4単位・松岡）
「日本語第二」（中級・週2コマ・夏・4単位・川口・水3、4）
「日本語第二」（中級・週2コマ・冬・4単位・小林 水3、4）
「日本語第三」（上級・週2コマ・夏・4単位・三枝）
「日本語第三」（上級・週2コマ・冬・4単位・今村）
「日本語第四」（特殊・文章表現1 週1コマ・夏・2単位・松岡）
「日本語第四」（特殊・文章表現2 週1コマ・冬・2単位・松岡）
「日本語第四」（特殊・CAI・週1コマ・夏・2単位・三枝）
「日本語第四」（特殊・CAI・週1コマ・冬・2単位・三枝）
「日本語第四」（特殊・読解・週1コマ・夏・2単位・松岡）
「日本語第四」（特殊・文法・週1コマ・冬・2単位・三枝）

- * 1) 今村が第三（冬）も担当することになった。
2) 非常勤講師を2名に増やした。
3) 第四も含めて、後期日本語科目はすべてゼメスターで統一した。

1994（平成6）年度

- 前期日本語科目 「日本語A」（1年次・週1コマ・通年・2単位・三枝）
「日本語B」（2年次・週1コマ・通年・2単位・松岡）
「日本語C」（1年次・週1コマ・通年・2単位・三枝）
- 後期日本語科目 「日本語第一」（中級a・週2コマ・夏・4単位・今村）
「日本語第一」（中級a・週2コマ・冬・4単位・三枝）
「日本語第一」（中級a・週2コマ・夏・4単位・小林・水3、4）
「日本語第一」（中級a・週2コマ・冬・4単位・田辺・水3、4）
「日本語第二」（中級b・週2コマ・夏・4単位・松岡）
「日本語第二」（中級b・週2コマ・冬・4単位・松岡）
「日本語第二」（中級b・週2コマ・夏・4単位・田辺・水3、4）
「日本語第二」（中級b・週2コマ・冬・4単位・小林・水3、4）
「日本語第三」（上級・週2コマ・夏・4単位・三枝）
「日本語第三」（上級・週2コマ・冬・4単位・今村）
「日本語第四」（特殊・文章表現1 週1コマ・夏・2単位・松岡）
「日本語第四」（特殊・文章表現2 週1コマ・冬・2単位・松岡）
「日本語第四」（特殊・CAI・週1コマ・夏・2単位・三枝）
「日本語第四」（特殊・CAI・週1コマ・冬・2単位・三枝）
「日本語第四」（特殊・文法a・週1コマ・夏・2単位・松岡）
「日本語第四」（特殊・文法b・週1コマ・冬・2単位・三枝）

- * 「初級」「中級」の名称を改め、「中級a」「中級b」とした。

1995（平成7）年度

前期日本語科目 「日本語A」（1年次・週1コマ・通年・2単位・三枝）

「日本語B」（2年次・週1コマ・通年・2単位・松岡）

「日本語C」（1年次・週1コマ・通年・2単位・今村）

後期日本語科目 「日本語第一」（中級 a1・週2コマ・夏・4単位・三枝）

「日本語第一」（中級 a1・週2コマ・冬・4単位・三枝）

「日本語第一」（中級 a2・週2コマ・夏・4単位・梅岡・水3、4）

「日本語第一」（中級 a2・週2コマ・冬・4単位・梅岡・水3、4）

「日本語第二」（中級 b1・週2コマ・夏・4単位・松岡）

「日本語第二」（中級 b1・週2コマ・冬・4単位・松岡）

「日本語第二」（中級 b2・週2コマ・夏・4単位・小林・水3、4）

「日本語第二」（中級 b2・週2コマ・冬・4単位・杉田・水3、4）

「日本語第二」（中級 b2・週2コマ・夏・4単位・西谷・水3、4）

「日本語第二」（中級 b2・週2コマ・冬・4単位・西谷）

*同一内容のクラスを同時間帯に2つ設けた。

「日本語第三」（上級 週2コマ・夏・4単位・三枝・今村）

「日本語第三」（上級 週2コマ・冬・4単位・今村・三枝）

「日本語第四」（文章表現1 週1コマ・夏・2単位・松岡）

「日本語第四」（文章表現2 週1コマ・冬・2単位・松岡）

「日本語第四」（CAI 週1コマ・夏・2単位・今村）

「日本語第四」（CAI 週1コマ・冬・2単位・三枝）

「日本語第四」（文法1 週1コマ・夏・2単位・三枝）

「日本語第四」（文法2 週1コマ・冬・2単位・三枝）

「日本語第四」（口頭表現・週1コマ・夏・2単位・今村）

「日本語第四」（口頭表現・週1コマ・冬・2単位 今村）

「日本語第四」（翻訳の日本語・週1コマ・冬・2単位・今村）

* 1）非常勤を3名に増員し、水曜日の午後に中級を3つ並行して設定した。

2）今村が日本語日本事情担当教官となった。

1996（平成8）年度

この年から全学一斉に新カリキュラムが導入されて、履修規定・履修方法が大きく変わり、履修単位数の軽減をとまう履修特例はなくなった。日本語科目に前期科目・後期科目といった区別がなくなり、教養教育・共通基礎・日本語科目として外国語科目の一つとなったが、「学部正規生のための日本語科目」と「全留生のための日本語科目」の区分と履修要件の違いは新カリキュラムにも残した。なお、新カリキュラム・新履修規定に一斉に切り替えたため、部分的に移行措置が必要となったが、適宜対応した。

「学部正規生のための日本語科目」

夏学期 「日本語A」（1年次・週2コマ・4単位・三枝/今村）

冬学期 「日本語B」（1年次・週2コマ・4単位・三枝/今村）

* 1）通年開講をゼミスターに改め、1年でA、Bが終了できるようになった。

2）単位の認定基準が統一され、従来の2単位から4単位となった。

3）夏学期は小平キャンパスで、冬学期からは国立東校舎で行なった。

4）新2年生には「日本語講読」や日本関係の「教養ゼミ」を履修させ、それを旧カリキュラムで2年次履修予定であった「日本語B」に読み替えた。

「全留学生のための日本語科目」

- 夏学期 「日本語第一 a」(週 2 コマ・4 単位・西谷)
「日本語第一 b」(週 2 コマ・4 単位・梅岡)
「日本語第二 a」(週 2 コマ・4 単位・三枝)
「日本語第二 b1」(週 2 コマ・4 単位・杉田)
「日本語第二 b2」(週 2 コマ・4 単位・丸谷)
「日本語第三」(週 2 コマ・4 単位・今村)
「日本語第四・文章表現 I」(週 1 コマ・2 単位・松岡)
「日本語第四・文法 I」(週 1 コマ・2 単位・松岡)
「日本語第四・CAI」(週 1 コマ・2 単位・西谷)
「日本語第四・日本語講読」(週 1 コマ・2 単位・松岡)
- 冬学期 「日本語第一 a」(週 2 コマ・4 単位・西谷)
「日本語第一 b」(週 2 コマ・4 単位・梅岡)
「日本語第二 a」(週 2 コマ・4 単位・三枝)
「日本語第二 b1」(週 2 コマ・4 単位・小林)
「日本語第二 b2」(週 2 コマ・4 単位・丸谷)
「日本語第三」(週 2 コマ・4 単位・今村)
「日本語第四・文章表現 II」(週 1 コマ・2 単位・松岡)
「日本語第四・文法 II」(週 1 コマ・2 単位・三枝)
「日本語第四・口頭表現」(週 1 コマ・2 単位・今村)
「日本語第四・CAI」(週 1 コマ・2 単位・三枝)
「日本語第四・翻訳の日本語」(週 1 コマ・2 単位・今村)

